〝淪陥期〟上海における日中文学の〝交流〟史試論

――章克標と『現代日本小説選集』――太平出版印刷公司・太平書局出版目録（単行本）

大澤理子

『現代日本小説選集』と題する二冊の単行本がある。上海は所謂〝淪陥期〟の只中の一九四三年八月と一九四四年四月にそれぞれ第一集と第二集が発行された。第一集は十五作家による十五作品を、第二集は八作家による十作品を収める（二冊あわせて二十人の作家による二十五作品となる）。本論末尾に同書の全目次を「付録一」として挙げる（なお括弧内には、今回の調査により日本語原題および初出が判明したものについてはそれを、判明しないものについては収録単行本（初刊本と思われるもの）をあわせて記す）。

単行本の翻訳者は章克標、出版社は太平書局。これらはいずれも章が「許竹園」の筆名で翻訳し、雑誌『訳叢』に毎月一篇づつ（長いものは二回に分けて）掲載されたものであり、多少の加筆削除があるが、ほぼそのまま単行本にまとめられている。

その初出媒体である雑誌『訳叢』は、南京中日文化協会（一九四〇年七月創立）の機関誌として一九四一年二月に創刊され一九四四年六月に停刊。編訳及び発行が中日文化協会訳叢月刊編訳委員会、発売は上海中華日報館と中央書報発行所。「総編訳」すなわち編集長は九州大学卒の広東人郭秀峰で、政府宣伝部の指導司（四司の一つ）司長を経て宣伝部次長となり、中華日報館（後述）の社長も兼任していた人物である。章克標は一九三九年からその中華日報館で働いてお

り、『訳叢』の「専任編訳」スタッフとしての章は「章建之」の名前で参加しているのが奥付けに確認される。(1)

創刊号には「本会名誉会長」として汪精衛の近影と、宣伝部部長林柏生の巻頭の言葉が載り、毎号の内容はその大半が『改造』『日本評論』等日本の雑誌からの翻訳転載であり、その発行日付からみて、遅くとも一ヶ月ほどのちにはすぐさま時事的時局的な文章の翻訳がされていることがわかる。翻訳文学作品の初出は明記されていないが、その多くがやはり同時期の総合雑誌、文芸雑誌から選ばれていることが調査により判明した。

収録作品のラインナップをいま見てみると、当時活躍中であった文壇作家を中心にその作風は多彩に渡り、また日本が戦争に徐々に傾斜してゆくこの時期にあって作家たちがそれぞれの戦争との関わりを作品内外に（否応なく）反映させているのを読み取ることもでき、一時代を切り取ったアンソロジーとしても興味深いものとなっている。

上田広、火野葦平は「帰還作家」として活躍めざましく、大滝は「第一回大陸開拓文学賞」受賞作家。丹羽、中山、林、高見、井上、森らも特派員乃至は報道班員として中国や南方へ従軍または滞在し、それをもとにした作品をこの時期書いている。そして召集、大陸開拓、日米戦開戦、従軍、南方滞在、出征中の人物の不在、といったモチーフは作中の随所に現れてくる。

訳者である章克標（一九〇〇年～）の一九一八年から一九二六年にかけての日本留学（東京高等師範学校で数学を専攻）時期は、ちょうど五四運動及び新文学の胎動期にあたり、当時の日本留学生の間では積極的な〝活動分子〟として名を知られていた周仏海等の人物たちの政治活動や、創造社の成立などを周辺の出来事として記憶しており、また自身も文学への志をたてる。帰国後は上海で作家活動を開始すると同時にその発表媒体である雑誌の編集業務及び母体の出版社経営事務、そして中高等教育機関での教職に携わるという、典型的な〝海派〟的兼業作家のひとりである。

『九十自述』（中国文聯出版社、二〇〇〇年）および『章克標文集　下巻』（上海社会科学院出版社、二〇〇三年）という章

の回想録からは、その時々の政治的社会的変動にすぐさま左右されては短期間のうちに絶えず場所を変えながら複数の出版社や教育機関に参加するという、当時の中国における職業としての専業作家や出版業の成り立ち難さについて、さらには上海の〝淪陥〟に際してもこうした身の振り方の〝選択〟のメカニズムが働いたことが垣間見える興味深い資料となっている。

留学からの帰国後間もない一九二六年、章は母校でもある嘉興の浙江第二中学で教鞭をとっていたが、翌年の蔣介石による四・一二クーデターに伴う共産党勢力排除の動きは、その頃共産党の思想や運動に共感を寄せる者も多く抱えていた多くの中高等教育機関に大きな影響を与え、これにより彼も職を失することになり、同年後半には上海の暨南大学に職を得て上海へ移り開明書店で編集の仕事をしながら、同社が開いていた通信学校（函授中学）の教員として働いた。

章が次に上海を離れる一九三五年までのこの時期が、彼の編集者、そしていわゆる〝唯美派〟作家としてのイメージで知られるキャリアの全盛期となるが、それは同人結社「獅吼社」での活動と、邵洵美の知遇を得て金屋書店や時代図書印刷公司に携わったことが大きかった。邵が潤沢な資金をもとに興した「金屋書店」[2]の経営に参加した章は雑誌『金屋』[3]の主編を担当、自身の長編小説『銀蛇』をはじめ短編集『恋愛四象』、『蜃楼』、また武者小路実篤の『愛欲』の翻訳等をここから出版している。そして邵洵美が次いで時代図書出版印刷公司[4]を興すとそれにも関わり、同社が林語堂の『論語』雑誌[5]の発行を請け負うようになると、「論語派」周辺の作家の一人としてもかぞえられるようになる。また自費出版ながら相当数が売れかつ話題にもなった『文壇登龍術』（一九三三年）は魯迅による邵洵美批判のきっかけを作ったことによりさらに有名となった。したがって章は流行作家であるとか、文学運動の中心にいたとはいえないまでも、とにかく文壇には一定の位置を得ていた作家であったといえよう。

その後の章は思うところあって〝隠遁〟生活を望み上海を離れ嘉興中学で教職に就く（回想録によればそれは〝ごく個人的なものに発している〟とのこと）のであるが、日中戦争に伴いこの後しばらくして起こった江南地域の変化は奇しく

も、四・一二クーデターの影響から上海行きを余儀なくされた一九二七年と極めて似た状況を再び彼にもたらすこととなる。

一九三七年の〝七七〟及び上海における〝八・一三〟に伴っての戦線南下の影響により、当時勤めていた故郷の嘉興中学が休校となり、このとき嘉興や杭州地域の多くの人々が租界地区の安全を見越して一九三八年時点で既に〝孤島〟となっていた上海を目指して避難するという動きが出ていた。章は一九三八年初めに上海に戻り、邵洵美の時代書店門市部の三階の空き部屋に住み始めるが、開明書店にそれまでの印税の残りが千元弱あり、その時持っていた数百元の現金を使い終わったらそれを使うことができる、という算段から、何のつてもない内地へ行くよりは確実に生活の保障がされる、という判断に基づき妻と両親を連れて上海に移り、そしてそのまま留まることになる。

こうして〝糊口をしのぐため〟汪派新聞、すなわちいわゆる〝和平紙〟とは知らずに一九三九年に中華日報社[6]の翻訳スタッフに応募して採用され、翌一九四〇年三月の南京政府成立後は中央電訊社[7]に転属、一九四二年冬に蘇州で江蘇省宣伝部に異動、一九四三年春に杭州で『浙江日報』に就任し、『浙江日報』を一九四五年一月に辞して帰郷するまでの経緯について、章自身は〝私の淪陥生涯〟と悔恨を込めて回想し、また自分と同様こうした機関で働いていた文化人たちの態度についても、上層部はともかく一般職員はそのほとんどが〝日々をいいかげんにやり過ごす（混日子）〟という態度であったとしながらも、その事情や心理には余り立ち入ることなく客観的に記録している。[8] この〝選択〟をめぐっては文学史上の「文化漢奸」という微妙な問題に関連して今なお議論され続けているのであるが、本論ではひとまず、彼のその選択が、ここでもやはり日本留学により習得した日本語能力と、編集や翻訳といったそれまでの経験を生かす（それは作家として華々しく活躍する機会というよりは、かつてはそれをもって文学的成功を知られもしたその名前を変えることすら厭わない、いわば〝裏方〟の仕事であったといえよう）もっとも堅実で地道な選択に他ならず、またそれはさまざまな機会に通訳、翻訳、雑務として借り出されるなど、かなりのハードワークをともなうものであったということを確認してお

きたい。

一九四三年に東京で開催された第二回大東亜文学者大会の三日目（八月二十七日）に行われた本会議では〝最近一年の中国文学界の活動状況〟について話し合われたが、この報告の中で、中国における日本文学の翻訳、紹介の成果について、林芙美子、北条民雄、上田廣、横光利一、舟橋聖一、中島敦、火野葦平らのものがあることが報告された。これは『現代日本小説選集』の目次からもわかるように、章克標がこれらの作家の作品のほとんどを手がけている。また同日に行われた第三分会では東亜文学、とくに日中文学の間の交流と中国文学の現状について議論が行われ、第二の議題において章克標自身が発言し、中国（華中、華北、満州国といったいわゆる〝和平区〟すなわち〝淪陥区〟）における日本文学翻訳従事者の減少（〝事変前百人くらいいたのが現在はせいぜい十人ほどである〟と具体的な数字を挙げての報告がされた）が訴えられ、〝翻訳委員会〟〝翻訳協会〟を設立して日本文学翻訳を促進する必要と、各地（例えば〝華北と華中〟）ごとでの翻訳の重複を避けるためこうした会で翻訳するべき書物の選定と訳者への委託を行う制度を作ること、等が提案された（『文学報国』三号、一九四三年九月十日）。章はもちろん大会にも代表として参加し、さらには通訳としての仲介役の雑務に追われていた一人であり、それは巌谷大四『非常時日本文壇史』（中央公論社、一九五八年）のなかのエピソードからもうかがえる。(9)

『訳叢』月刊における翻訳作品の選択に関して章は次のように回想する。

当時、日本の文学雑誌や一般的な読み物、また新刊の出版物を読む機会が我々にはあったため、これらの中から題材を選んで訳した。私の選択というのは、目下の政治方針を回避した採択であり、当時の彼らの政策方針に協力したり、政治運動に奉仕するようなものは全てできる限り避け、時代を超えた、さほど時事に及ばないような作品を毎月一篇

選び、のちにまとめられて『現代日本文学選』として太平書局から出版された。[10]（『章克標文集　下』p.二〇八）

太平書局について章は次のように述べる。

誰の出資で創設されたかわからないが、とにかく草野心平（日本人詩人。林柏生と嶺南大学の同級生であったため、汪宣伝部で顧問をつとめる）の勧めに基づき、彼により一切がすすめられた。彼はさらにこの出版社のために、当時日本で大変評判となった、らい病間者の生活に関する作品を私に翻訳させ、『癩院受胎その他』として、これもまた太平書局から出版された。これはのちに『北条民雄短篇小説集』と解題された。これらの本はあたかも優曇華の花の現れるが如く、抗戦勝利後は出版社もなくなり、本もまた消えてなくなってしまった、そこでここに今一度言及した次第である[11]（前掲書p.二〇八）[12]

そして章による草野の印象は以下のとおり。

恐らくは日本軍の紹介ではなく、自ら求めて宣伝部に就職したのであろう。この詩人は些か旧式詩人ふうの自由奔放な雰囲気があり、いつも麻袋を加工した麻布で仕立てたスーツを着て、少し広東語を喋り、広東人とやり取りをし、決まった仕事はなく、時に南京に出没し、また時に長らく顔を見せず、どこに行ったのやらわからない。皆彼のことを変人とみなしていた。しかしながら常に汪偽宣伝部職員というのを名に掲げており、日本の著名人士や文学者たちの訪問の際にはしばしば招かれては案内をし、おそらく宣伝部はこのために彼を用いていたのであろう。平時は宣伝部を訪れる日本人も少なく、したがって彼はかなり暇だった[13]（前掲書p.二〇九）。

以上、二冊の作品集を契機として、その訳者である章克標の〝孤島期〟から〝淪陥期〟にかけての回想を引いて見て

きた。南京政府宣伝部や中華日報社といった権力の中枢に近い出版・言論メディアに携わった人物たちは、戦勝の終結を境目としてその後〝文化漢奸〟としての社会的な制裁を受けることとなり、ある者は人民共和国以降は中国を離れ、またこの時期の経験についても沈黙を守り続けた（続けている）者が多い中で、数少ない生き証人として、それらの機関における見聞や人間もようをつぶさに書き残している章の回想は貴重なものである。しかしながらこの記述からもわかるように、あくまで与えられた仕事に専心していた彼は、このときの上海の出版界の全貌やメカニズムを把握する位置にはおらず、その認識もごく局部的なものにとどまっていたようなのである（さらに長い年月を経た後に追跡調査する興味や意思も持たなかったらしい）。

そもそも筆者がこの上下二冊の作品集をもって〝淪陥期上海における日中文学の〝交流〟〟論への導入部分としたのはごく単純な理由に基づいてのことである。〝優曇華の花の如く〟現れるなりたちまち消え去った、とされる太平書局の刊行物であるが、二〇〇六年現在、日中両国の公共図書館と大学図書館および古書市場において相当数が確認されており、当時の目録から拾ったものも合わせると、単行本だけでもその数は五十七タイトルにのぼる（筆者が現物を確認したものはそのうちの約三分の二）。そしてさらにそのラインナップを挙げるなら、この短期間における上海の文学界がたどった変遷の特徴的な痕跡をも見て取れるのであり、それは『現代日本小説選集』であるなら、翻訳という作品的〝交流〟ともいえるであろうが、さらには当時の日中両国間の文学の人的〝交流〟という背景をも浮かび上がらせるのである。

そこで次に太平書局の出版物を概観しておきたい。

後述するように、この機関の短い社史においてまずは経営母体としての太平出版印刷公司の〝接収〟による創設があ

り、ついで単行本の発行を目的とした太平書局の設立、太平出版印刷公司「出版部」設立、太平書局の改組、と、まずは印刷設備と印刷用紙を掌握することから出発し、ついで出版部門に乗り出してゆくという一定の経緯がある。同社から発行された雑誌には同社設立以前から引き継いだ『長江画刊』[14]という宣撫目的の総合グラフ雑誌があり、さらに『風雨談』[15]、『女声』[16]といった編集者の個人的色彩、資金的独立性の強いもの、また『新少年』[17]のように関係者の回想による証言のみで現物および書誌が一切不明のものや、『太平洋週報』[18]といった、同社との関係がいまひとつ明確でないものもあるのだが、これをひとまずのぞいて単行本のみを対象としたリストを「付録二」として本論末尾に挙げる。

リストを一瞥してみてわかるように、主として創立間もない時期に刊行されている〝新国民運動〟や〝大東亜建設〟の言論と連動した政治宣伝目的のパンフレット的な刊行物や日本語の教本類と並んで、この時期に最も顕著な現象であった〝日本〟（日本語による刊行物。翻訳文学。現地在住日本人作家による作品集）や〝散文〟（周作人、紀果庵、文載道――これは『風雨談』を中心として起こったいわゆる〝清談〟〝懐古〟〝考証〟熱における主な執筆者にも重なる）、〝通俗小説〟（予且、秦瘦鴎）、そしてこの時期新たに登場した作家群（柳雨生、譚惟翰、丁諦、女性作家――張愛玲、蘇青、程育真、施済美等――）といった要素がそのままここから見て取れる。

また時間的な推移をみるなら、〝荒漠たる豊作〟の年[19]とされた一九四三年度から出版点数が増えていることに加え、用紙の不足がいよいよ深刻になり始めた一九四四年に最も多くの出版を行っていることにも注目され、配給用紙の掌握という絶対的優勢を持つ立場にあった同社がそれをいかに利用したか、ということのひとつの結果をみることができる。

無論、これら以外には単行本化されていない夥しい数の雑誌掲載作品が存在するのであり、また他の雑誌社、出版社からも注目すべき単行本は刊行されているのであるが（たとえば中華日報社、雑誌社、大陸新報社、永祥印書館等）、出版点数は少なく、またこうしたひとつの時期と地域にわたる文学の傾向と変遷の概観ができる出版社目録が現在のところ不

完全ながらも特定し得るのは、太平出版印刷公司および太平書局以外になく、ここに敢えて全目録を挙げた次第である。

ところで、この時期の〝淪陥区〟文学界における同社の重要性は確認できたとしても、清末以来新文学運動を経て常に中国における出版の中心地であった上海の歴史から見た場合、著名作家や出版社の多くが閉鎖に追い込まれたり奥地へと移ったこの時期の状況は全体的にはやはり全く貧弱であるとしか言いようがない、との客観的見解[20]は、先の〝荒漠たる豊作〟という逆説的な言説と同様に、当然ながら成り立つであろう。しかし一方でまたそのような見解は既成作家の不在を〝空白〟とみなし、この時期に萌芽しつつあった新たな文学の可能性というものを同時代にありながら――或いは同時代にあったが故にというべきか――重視していないことのあらわれでもあり、そしてその背景には〝通俗〟〝海派〟的なものに対する蔑視という（根強い）文学観[21]が存していたことが指摘できよう。

潘予且はもともと多作にして押しも押されぬ流行作家として広く読まれていたことは確かであったが、そこに〝大東亜文学賞を受賞した〟ゆえに一種の権威を付与され祭り上げられ、その一方では様々な理由で多くの批判も受ける、という現象がこの時期起こっており[22]、またそれに先立っては〝通俗文学運動〟といった所謂〝旧派〟文人側からの注目すべき動きもあった[23]。つまり〝淪陥期〟上海においては、一貫してこうしたより普遍的な（日中両国に共通の）文学観の是非に対する問題意識が持たれ、また制限されたかたちでとはいえ、議論もしばしば起こっていたことがわかる。

したがって以下のような記述はあながち日本側の誇張宣伝ないしは希望的観測とばかりもいえず、太平出版印刷公司及び太平書局が当時において有した重要性の根拠としてもある程度の客観性を備えていると思われるのである。

〝三十二年において注目に値するひとつの出版機関があるが、それが太平出版公司である。『太平月刊』以外に、大東亜文学賞を受賞した予且の『予且短編小説集』や…〟（『申報年鑑　一九四四』申報社、一九四四年刊）

〝…上海の太平書局等の先駆者としての苦労はこれから次第に実を結ぼうとしており…〟〝近一年来極めて目ざましい活躍をなしたものに太平書局がある。之は民国三十三年六月、旧太平書局を接受改組して創弁されたもので総経理陶亢徳、

副総経理柳雨生により経営され出版書籍は文学及び一般文化に重点が置かれて居る。…前記「文学」項中所載の文学出版書籍は同書局の出版に係るものが甚だ多い〟（『大陸年鑑』昭和二十年度、大陸新報社、一九四四年刊）

そしてその〝文学及び一般文化に重点が置かれた〟太平書局の刊行物のひとつである『現代日本小説選集』の収録作品が、基本的に章の個人的な選択によるものであると同時に、この時期の日中文学（文学者）間の実際の〝交流〟の状況をも直接的及び間接的に映し出すものであることは興味深い。[24]

冒頭で取り上げた単行本に作品が収録されているのは言わずと知れた当代一の有名作家、気鋭の作家たちであるが、彼らの多くが実際の〝交流〟の場面にも顔を見せている。上田広や火野葦平などのいわゆる〝帰還作家〟は無論その〝戦争への参加〟を以て作家としての地位を確立し、大掛かりな〝戦争見学〟としてのペン部隊や作家の従軍活動は中国のみならず南方においても広く行われ、その〝成果〟は体験ルポあるいは小説として発表された。さらには上海だけに限っても大小さまざまな催し物や企画の設立に向けた活動などが、太平洋戦争開戦後すなわち日本軍による上海占領時期に入ってから頻繁に行われ、そしてその集大成が〝国家的イベント〟としての合計三回の〝大東亜文学者大会〟であった。

本論がここで前もって強調しておきたいのは、そうした〝交流〟の表舞台においてはこれら著名作家たちによる〝華々しい〟――その多くが現在の視点からは〝空々しい〟〝虚しい〟とされるしかない種類の――活動や発言が飛び交い、そしてそれが逐一報道され記録される一方で、その〝交流〟の実際のセッティングというものが、半ば無名の文学者（あるいは文学者予備軍）兼編集者（時にはどちらとも判然としない）ともいうべき多くの人々――日本人と中国人とを問わず――によって担われていたということである。

先に見てきた章克標はすでに〝淪陥〟前の上海文壇ではベテラン作家といってもよい立場にあったものの、中国における専業作家という職業の自立の困難、そして日本による占領という特殊時期の状況下ではやはりこのような位置に甘んじなければならなかった。彼は中国側におけるそうした人間のひとり（かつそれを今に伝える数少ない貴重な証言者）であり、そして当然ながら日本側にもまたそうした人間が多数いたのである。そうした人びとが集った場所の中でも、活動の中心として最も目立っていたのが太平出版印刷公司および太平書局であった。

ジャーナリズムや文学史において出版人や編集者の果たした役割に注目がされ、新たな照明を当てる試みがされている近年、〝時代を過渡期に変えてゆく人間のことを編集者と呼ぶ〟[35]という発言がある。日本における報道写真の立役者と言われる名取洋之助は、印刷され出版メディアに乗って流通するがゆえの写真の重要性をいち早く認識した人物であり、まさに写真史の一時代を過渡期としてしまうような牽引力を及ぼしたといえる。それゆえに写真家として以上に編集者としてその名を今に刻むのであるが[26]、その彼が日中戦争を契機として拠点を上海に移し、写真および出版事業の次なる時代を用意するべく手がけたのが、他ならぬこの太平出版印刷公司、太平書局であった。

ところで章克標の回想によれば章と太平書局との間をとりもったのは草野心平である。彼は広州・嶺南大学時代の同級生でもある友人、林柏生（南京政府宣伝部長）の招聘により顧問或いは嘱託のような身分で当時南京に滞在しながら太平書局の顧問を兼職していた。すでに名を成した詩人として上海ー南京在住の日本人（そして日本人による文学同人結社）の中でも有名人であった彼は、詩篇、エッセイを問わず、日本および現地発行の雑誌や新聞への寄稿が途切れることがなく、いわばこの時期の〝日中友好〟の象徴的存在であったといえよう（そしてそのゆえに彼の発言や文章は、この後の戦局の変化を受けて大きな振幅を示すことにもなるのだが）。そして自らの詩集『黄包車　わんぽつ』（ブロッホ版画）も太平書局から一九四二年十二月に出版している。[27]草野は後の回想で、林によって田村俊子と引き会わされ、雑誌発行の後

ろ盾を探していた田村のために自分が太平出版印刷公司の経営者である名取洋之助に紹介して『女声』発刊に至ったこと、また自身の発案で翻訳出版に至った中島敦の『李陵』について述べているが、あくまでも顧問という立場上、太平出版印刷公司および太平書局の経営には関わっておらず、また名取本人とも徐々に疎遠になっていった経緯もあり、戦後三十年余りを経たこの時期の記憶はすでにおぼろげであったようである。

ところで盧錫熹訳の中国語の『李陵』は昭和十九年の八月に発行されているが、『黄包車』から『李陵』発行までの約二十一ヶ月間に何も発行されなかったとは思はれず、多分は大東亜文学者大会に出席した中国文学者の二三の著作が太平書局から出版されたやうにも思はれるのだが、扨てその著者は誰れであり書名は何んであつたか、今の私にはまるで記憶がない[28]

しかしながら、草野にとっての中国体験（およびこの時期の上海・南京体験）がどのようなものであり、またそこでの中国の出版人および文学者との〝交流〟がどのようなものであったのかについてはむしろ、その四十五年間にわたり書きつづけた手帳と日記（『草野心平日記』全七巻、思潮社、二〇〇五～二〇〇六年）の断片的な記述においてより一層生々しく見ることができる。それはたとえば、中国滞在時期の人脈（日中双方）が戦後ずっと続いているあたりであり、また同じく〝淪陥期〟の上海・南京を、異なる立場と思惑を持って過ごしていた陶晶孫に対する思い、というものからもうかがえる。草野は一九五二年に日本で亡くなった陶の著作『日本への遺書』を数年に一度読み返してはそのたびに「悲しく痛烈な本である」（一九七三年六月二十五日）、「改めていい本だと思ふ」（一九八〇年三月十一日）などと記している。

以上、日中戦争時期に出版された同時代の日本文学の翻訳小説集からたどって、その翻訳者である中国人作家と、また顧問としてこの出版機構に関わった著名な日本人詩人という、二人による回想を引き、さらには現在までのところ明

らかになっている同社の出版目録を付した。ここでようやく単行本の出版元である太平書局、そしてさらにその母体である太平出版印刷公司の成立から消滅までの三年と八ヶ月あまりの短い歴史を論じる用意が出来たことになる。

それは太平洋戦争開戦のその時と同時に行われた日本軍の上海租界進駐にともなう英米系〝敵性資産〟の〝接収〟に始まり、日本の敗戦からすぐ後には内陸から戻ってきた中国国民党に〝接収〟されて幕を閉じる、という因縁めいた歴史であった。そしてその四年足らずの間には上述の単行本の発行という、現在にまで残る活動の何よりも確かな痕跡があり、その一方で上海―南京を舞台とした日中文学〝交流〟の場の提供、そのいわば立役者としての重要な働きをしたのが、当時同地では「名取機関」という呼称で知られた太平出版印刷公司・太平書局の「黒幕」ともいわれた名取洋之助その人であった。

この印刷・出版機構の出自は、そもそも名取洋之助という一人の日本人の個人的な才覚とアイディア、職業的野心が、戦争を契機として軍の後ろ盾を取り付けたところに存する。ここには彼の〝愛国心〟と日中〝友好〟の理想、一時代の中でのその無力と挫折があり、名取自身が深く関わった日中文学者間の束の間の“交流”があったのであるが、それは〝日本人の上海〟[29]という、現れてすぐに消えた〝まぼろし〟の季節においてのみ存在し得た、まことに不確かなものでしかなかった。日本における報道写真すなわちフォトジャーナリズムの創始者である名取洋之助は、カメラマンであり、グラフ雑誌のかたちを最初に築きあげた編集者であり、そして文化パトロン、天才的なオルガナイザーでもあった。その名取が日中戦争時期において戦争宣伝、そして文化交流に関わる全く新しい事業に熱中し、中国に骨を埋める覚悟さえしていたことなどは、これまで彼の個人史におけるひとつの特殊な時期のエピソード、という以上の注目は受けてこなかった。日本および中国の文学史にも関わってくるこれらの事実の多くは、一般の目に触れにくい回想録や断想として綴られた文章の中に埋もれている。

したがってこれらの人々をめぐるネットワークを既知の文学史のそれと縦横に結び付けた記述はいまだまとまった形

ではなされていないといえよう。そこで今後は本論を導入部とする一連の〝淪陥時期上海における日中文学者同士の交流〟についての論稿を進めてゆくつもりである。太平出版印刷公司および太平書局においては有名無名含めて文学者から技術者まで実に数多い人びとが関わったのであるが、続く論考においてはこれらの人びとに焦点を当て、その機構や組織そのものについては、やはりさきほどの章克標の言葉をひいて〝優曇華の花の現れるが如く〟現れて間もなくたちまち消えた、というほかはない、その短い歴史を明らかにしてゆきたいと思う。

付録一：

『現代日本小説選集』第一集、章克標訳、太平書局、一九四三年八月
「秘色」（「秘色」）横光利一（初出『中央公論』一九四〇年一月号）
「不開的門」（「開かぬ門」）丹羽文雄（初出『日の出』一九四〇年十一月号）
「往海洋去」（「海に行く」）葉山嘉樹（初出『改造』一九四二年五月号）
「山師」（「山師」）中山義秀（初出『文芸』一九三九年四月）
「大学生」（「大学生」）林芙美子（初出『婦人公論』一九三九年十月号）
「在山峡裏」（「山峡にて」）火野葦平（初出『新潮』一九四一年一月号）
「枯木」（「枯木」）舟橋聖一（『木石』（一九四一年、新潮社）に収録）
「解氷期」（「解氷期」）大瀧重直（初出『中央公論』一九四二年六月号）
「風車」（「風車」）壺井栄（初出『文芸』一九三九年三月号）
「幸運児」（「幸運児」）荒木巍（初出『日本評論』一九四二年二月号）
「鴿」（「鳩」）窪川稲子（『扉』（一九四一年三月、甲鳥書林）に収録）
「蟋蟀」（「きりぎりす」）太宰治（初出『新潮』一九四〇年十一月号）
「冬初」（「冬のはじめ」）芹沢光治良（初出『改造』一九四二年一月）

「日麗天和」（「晴れたり君よ」）宇野浩二（初出『新潮』一九二四年四月号）
「冬街」（「冬の町」）上田廣（初出『文芸春秋』一九四二年六月号）

『現代日本小説選集』第二集、章克標訳、太平書局、一九四四年四月
「安南」（「安南」）森三千代（初出『中央公論』一九四二年五月号）
「地熱」（「地熱」）上田廣（初出『文芸春秋』一九四二年六月、七月、八月号）
「雨期」（「雨季」）上田廣（初出『改造』一九四三年二月号）
「帰来独白」（「帰っての告白」）高見順（初出『改造』一九四三年三月号）
「花種種」（「花さまざま」）高見順（初出『知性』一九四〇年七月号）
「春之記録」（「春の記録」）芹沢光治良（初出『文芸』一九四二年七月号）
「竹夫人」（「竹夫人」）井上友一郎（初出『日本評論』一九四三年一月号）
「某女的事」（「或る女の話」）大谷藤子（初出『改造』一九四二年二月号）
「木石」（「木石」）舟橋聖一（初出『文学界』一九三八年十月号）
「業苦」（「業苦」）嘉村礒多（初出『不同調』一九二八年一月号）

付録二：太平書局出版物リスト（未定稿）：全五十七冊（うち筆者が現物を確認済みのものは三十八冊）。
凡例：奥付けに記された発行年月日の古い順に通し番号をつけて列挙する。
無印は現物を確認したもの。＊は同書局の単行本末尾の出版広告および『風雨談』等雑誌の掲載広告、『太平書局出版図書目録』（紙片状。もとは雑誌の折込かと思われる。時期は不明だが、一九四三年度までに発行のものが掲載と推測）等に載った出版目録から拾った（「近刊」と明記しているもの以外は、発行済みとみなされる）もので現物は未確認。「発行（者）」は特記なきは全て「太平書局」。※に特記事項を記す。「日」は日本語、「中」は中国語の別。

一九四二年（三冊）：

一・『儒教之精神　上下篇』武内義雄著、高明訳、一九四二年十一月　※中
二・『黄包車（わんぽつ）：上海の黄包車に関する木版画六十』白緑黒（D.L.BLOCH、ブロッホ）・版画、草野心平・詩、一九四二年十二月　※中、日併記
三・『孫文論集』湯良禮篇、小倉満訳　一九四二年　※日

一九四三年（十七冊）：
四・『中国の豚』沼田宏、一九四三年一月　※日
五・『予且短篇小説集』予且、一九四三年七月　※中
六・『青年』林房雄著、張庸吾訳、一九四三年七月　※中
七・『現代日本小説選集　第一集』章克標訳、一九四三年八月　※中
八・『中国新国民運動論文集』柳雨生編、朝島雨之助訳、一九四三年九月　※日
＊九・『蔣介石を論ず』陳彬龢著、日本領事館特別調査班訳、一九四三年？
十・『四幕劇　余生』韋瑞生、一九四三年　※中
十一・『癩院受胎及其他五編　北条民雄短篇小説集』許竹園訳、一九四三年　※中
＊十二・『日本語教授法』渡辺正文、一九四三年？　※『太平書局出版図書目録』（配布時期不明）より。以下、十九まで同じ。
＊十三・『日本語中国語会話集』渡辺正文、一九四三年？
＊十四・『日本語紙牌』太平書局書局編纂、一九四三年？
＊十五・『日本字母描紅帖（初級）』太平書局書局編纂、一九四三年？
＊十六・『日本字母帖（中級）』太平書局書局編纂、一九四三年？
＊十七・『大東亜建設経済原理』谷口吉彦、長崎亨訳、一九四三年？
＊十八・『偉人與志士』太平書局書局編纂（連環画）、一九四三年？
＊十九・『新国民運動歌曲集』宣伝部編、一九四三年？
＊二十　『怎様学習日語呢』一九四三年？

一九四四年：（三十一冊）

二十一・『現代散文随筆選』迅風（周作人）編、一九四四年一月　※中

二十二・『現代日本小説選集　第二集』章克標訳、一九四四年四月　※中

二十三・『黎明（暁）』武者小路実篤著、張我軍訳、一九四四年四月　※中

二十四・『二舅』秦瘦鴎、一九四四年四月　※中

二十五・『懐郷記』柳雨生、一九四四年五月　※中

二十六・『牛骨集』陶晶孫、一九四四年五月　※中

二十七・『出発』路易士、一九四四年五月　※中

二十八・『両都集』紀果庵、一九四四年六月　※中

二十九・『文藝論叢』楊之華、一九四四年六月　※中

三十・『夜珠集』譚正璧、一九四四年六月　※中

三十一・『風土小記』文載道、一九四四年七月　※中

三十二・『支那人の日本語研究』菊沖徳平、一九四四年七月　※日。発行は「太平出版印刷公司出版部」

＊三十三・『現代中国短篇小説集　第一輯』室伏クララ訳、一九四四年七月？※日。「七月近刊預定」（『支那人の日本語研究』末尾広告より）

＊三十四・『現代中国短篇小説集　第二輯』室伏クララ訳、一九四四年？※日。「近刊」（『支那人の日本語研究』末尾広告より）

三十五・『入獄記』楊光政、一九四四年八月　※中

三十六・『留香記』予且著、神谷賛（小宮義孝）訳、一九四四年八月　※日。発行は「太平出版公司」

三十七・『中華民国居留』池田克己、一九四四年八月　※日。発行は「太平出版公司」

三十八・『李陵』中島敦著、蘆錫熹訳、一九四四年八月　※中

三十九・『人生悲喜劇』丁諦、一九四四年九月　※中

四十・『海市吟』（小説）譚惟翰、一九四四年九月　※中

四十一・『苦口甘口』周作人、一九四四年十一月　※中
四十二・『江南博物誌』小畠實、九四四年十一月　※日。発行は「太平出版印刷公司出版部」
四十三・『華譜蘭譜』小宮義孝、一九四四年十一月　※日。発行は「太平出版印刷公司出版部」
四十四・『六十回憶』周越然、一九四四年十二月　※中
四十五・『当代女作家小説選』譚正璧編、一九四四年十二月　※中
＊四十六・『怎様読通日語』太平書局編、一九四四年五月？　※「預定五月出版」（『懐郷記』末尾広告より）
＊四十七・『洋鬼子在中国』Carl Crow 著、許季木訳、一九四四年？　※中。『六十回憶』末尾広告より
＊四十八・『芭蕉俳句集』徐白林訳、一九四四年五月？　※中。「預定五月出版」（『懐郷記』末尾広告より）
＊四十九・『森鷗外選集』王眞夫訳、一九四四年六月？　※中。「預定六月出版」（『懐郷記』末尾広告より）
＊五十・『芥川龍之介選集』王眞夫訳、一九四四年六月？　※中。「預定六月出版」（『懐郷記』末尾広告より）
＊五十一・『甲申集』陶亢徳、一九四四年？※中。「太平書局出版新書」（『東方学報』創刊号、一九四四年十月、掲載広告）より

一九四五年：（六冊）
五十二・『人物風俗制度叢談』（甲集）、瞿兌之、一九四五年三月　※中
五十三・『何若雑文（甲集）』何若、一九四五年四月　※中
五十四・『一士談荟』徐一士、一九四五年六月　※中
五十五・『七女書』予且、一九四五年七月　※中
五十六・『立春以前』周作人、一九四五年八月　※中
＊五十七・『都会女児』許季木、一九四五年？　※中

注

（1）当時南京政府の各機関に参加した多くの文化人たちが、周囲の批難の視線から家族を守ることなどを考慮して偽名を用いたことは章自身の回想録に述べられる。後述。

（2）一九二八年（一九二九年とも）頃設立し約二年続く。単行本に邵洵美の『花一般的罪悪』『天堂与五月』及び章克標著作など。一九三〇年頃邵洵美が印刷機を輸入して金屋書店を引き継ぐ形で時代図書印刷公司を設立する。

（3）一九二九年一月創刊

（4）『時代画報』『図画周刊』『論語』（半月刊）『十日談』（旬刊）『人言』（週刊）などを発刊したが、経営は常に困難であり、抗戦時期には内地へ移動し活動を続けるも解放後には器材、工員ともども北京の新華印刷工廠に接収されることになった。

（5）一九三二年九月創刊。同年林語堂と邵洵美はともに『天下』英文半月刊も創刊。

（6）『中華日報』は香港『南華日報』の姉妹紙として林伯生により一九三二年四月十一日に創刊され、途中停刊と復刊を経て一九四五年八月二十一日の終刊まで全四千二百五十二期が出された。副刊文芸欄としてはこの時期には「中華副刊」が楊之華主編により一九四二年六月二十二日～一九四五年八月二十一日まで全六九三期が存続した。

（7）一九四〇年の汪政権新政府の南京〝遷都〟に伴い『中華日報』の母体である上海中華日報社では一部職員が南京へ異動となり、これと同時期に重慶国民党の「中央通訊社」に対抗して「中央電訊社」（社長は趙慕儒）が成立し、『中華日報』から章を含む何人かが異動となった。電訊社職員は南京の首都飯店に住み、そこを拠点にニュース発信等の業務を行った。中華日報、中央電訊ともに南京政府宣伝部直属の部所。

（8）張資平、胡蘭成、周化人、章克、袁殊、龔持平、潘柳黛、陳大悲、楊鴻烈、樊仲雲、陳農夫、古詠吟、林涵之（林達祖）、周大瀅（江上風）、朱重禄、などの名前がみえる。

（9）同書 p. 五十三、pp. 五十六～五十八。中国側代表の柳雨生が招宴の席で巌谷（日本側の事務雑用を担当）をつかまえて、当日夜の講演会の発表者が周越然から魯風に変更するというむねを伝えた。それによれば、周は話し下手ゆえに講演をいやがり、原稿も出来ておらず、また通訳者の章克標も周氏のなまりではとうてい通訳はできないと言う。直前で発表者が変更されることは大会運営側としては迷惑ではあったが、魯風が進んで引き受けたこともあり何とかこの問題は解決した。

（10）那时日本文学杂志及一般读物以及新的出版物，我们还有机会看到，就从这些书刊里挑选材料来译。我的排选是采取回避当前政治的方针，凡是配合当时他们方针政策，为政治运动效劳的东西，我竭力回避，只选些超越时代的，不太涉及时事的作品来选毎月一篇，后来结集起来，作为《现代日本文学选》由太平书局出版了。

（11）我也不知太平书局是谁出资来创办的，只是根据了草野心平（一个日本诗人，在汪伪宣传部做顾问，因为他同林柏生是岭南大

学同学）的劝说，由他去安排一切了。他还要我为那书店译了一本当时在日本有特别意义的关于麻风患者生活的作品，北条民雄的《癩院受胎及其他》也在太平书局出版。后来改题为《北条民雄短篇小说集》。这些书是像昙花一现，抗战胜利，店也消灭了，书也消灭了，因之在这里再提一提。

（12）文中にあるように、『訳叢』掲載の北条民雄の「生命的初夜」（「いのちの初夜」）のみが『現代日本文学選集』には収録されず、他の訳し下ろしの作品と合わせて『癩院受胎及其他五編　北条民雄短篇小説集』として同じ太平書局から一九四三年に発行されるが、こちらの訳者名は〝許竹園〟である。

（13）可能不是由日本军方介绍到宣传部来的，使他自己找了来的。这个诗人有点古式诗人的狂荡不羁的样子，常穿了一件用做麻袋的精麻布缝制成的西装，也会讲几句广东话，同广东人应酬，也没有一定工作，有时在南京出没，有时长久不露面，不知到哪里去了。大家认为它是个怪人。但总是个挂名在汪伪宣传部的职员。日本的知名人士，文人学者来访时，他经常被邀来作为陪客，宣传部也许拍了他这项用场。平时到宣传部来的日本客人不多，所以他是十分闲散的。

（14）一九四二年二月～終刊不明（一九四四年頃まで維持か？）。漢口陸軍報道部の機関誌。

（15）一九四三年四月～一九四五年七月。全二十期。柳雨生主編。『古今』（半月刊、一九四二年三月～一九四四年十月、全五十七期、周黎庵主編）などとともにこの時期の散文雑誌盛況の一翼を担い、〝従来大衆読物風の雑誌しかなかった上海で初めての純文芸雑誌〟（『文学報国』第一号、一九四三年八月二十日）とも報道されている。雑誌の内容について論じた研究に周海林「『風雨談』、その言説に内包された真実と虚構」（杉野要吉　編『交争する中国文学と日本文学　淪陥下北京一九三七—四五』（三元社、二〇〇〇年）

（16）一九四二年五月～一九四五年七月。全三十八期。田村俊子主編。田村俊子および関露と『女声』雑誌についての研究は丁言昭編選『関露啊関露』（人民文学出版社、二〇〇一年）の他、研究論文多数あり。

（17）一九四二年の春に創刊し終刊不明。室伏クララ主編、村尾絢子表紙及び挿絵（三井直麿「上海の記憶」（「日本工房の会」編集委員　編『Nippon 先駆の青春——名取洋之助とそのスタッフたちの記録——一九三四～一九四五』（日本工房の会、一九八〇年）所収）より）。

（18）一九四二年一月一日創刊。江洪主編。中国文化服務社発行。一九四四年三月に停刊宣言。その約五ヶ月後『現代週報』（一九四四年八月創刊、沈志遠主編）が後続誌となる。誌面かに〝本誌記者〟として名前の見える人物や、太平印刷及び太平書

局との直接の関わりを示唆する証言も複数あるが未確定。

(19) 周楞伽「三十二年度的上海小説（上）荒漠的豊収」（『文潮月刊』第二期、一九四四年二月・三月合併号。同「下」の掲載状況は不明）は、周が一ヶ月余りの時間を費やして精読した前年度一年間の八種類の雑誌に掲載された短編小説四二〇編と長編小説二十七編を取り上げ、それらが量のうえでは〝戦前〟の〝いわゆる「雑誌年」〟（『文学季刊』『新詩』『太白』『時代漫画』『小説』などの雑誌が相次いで創刊された一九三四年のこと。この年の前後が上海出版界全体のピークとされる。）と比べても遜色ないものであるとしながらも、質的には作品内容の貧困、題材の空虚を指摘し、十年後二十年後に残るようなものではない、と批判した。蘆焚（師陀）の小説に対しても同情と同時に反感を表明しているのだが、それがあくまで自身の作家としての立場による、さらに本質的な部分での小説観に根ざしたものであることに注目される。

(20) 〝昨年以降は中国連合出版公司の成立と太平書局の開店があり、世界書局等老舗出版社もまた新刊書を出版しているとはいえ、上海全体で毎月平均四、五冊もなく、「八・一三」以前には商務印書館が一日一冊新刊を出し、各出版社が競って新刊を出していた盛況を振り返ってみれば天地ほどもの差である〟（〝自去年以来、雖有中国聯合出版公司的成立和太平書局的開張、而且世界書局等老書店也在出版新書；但全上海毎月平均出不到四、五種、返観「八・一三」前商務印書館日出一新書、和各出版社競出新書時的盛況、那真有天壌之別〟（楊寿清「上海淪陥後両年来的出版界」『中国出版史料補編』（張静蘆　輯註、一九五七、中華書局）に収録（原載『文芸春秋叢刊　之一　両年』（一九四四年十月十日、永祥印書館））

(21) 張若谷の座談会における次のような発言がある。上海の文芸の歴史には三つの段階があり、最初は海派式の下らぬもの、次に北京の方からの流行が始まってそれが四方八方に行ってしまうと、また昔の海派式のものが出てくるようになった、現在はすなわち最後の段階である（一九四三年四月『大陸新報』）。

(22) 〝…北支の袁犀、中支の予且両作家も、文学賞を受けたことでか作品の内容の故か散々の非難の嵐に吹きまくられながら、気の小さい日本人には想像もつかない強靭さで続々と作品を製作し、この一年を頑張った〟（『大陸年鑑』昭和二十年度、大陸新報社、一九四四年刊）

予且著、神谷賛（小宮義孝）訳『留香記』（太平出版公司、一九四四年八月）「訳者跋」でも受賞及び作品についての批判があったことに言及。

(23) 『万象』一九四二年十月号、十一月号において特集。同誌主編の陳蝶衣の主導になる。予且もこれに寄稿している。

(24) たとえばこの作品集の中では発表時期がやや以前になる二作品（宇野浩二作品が一九二四年、嘉村作品が一九二八年）を入れたところに章自身の好みあるいは雑誌における体裁、バラエティへの考慮が反映されているのかもしれない。

(25) 寺田博、三浦雅士による対談「いま、編集者とは何か――はしがきに代えて」における寺田博の発言（『時代を創った編集者一〇一』（寺田博編、新書館、二〇〇三年）p. 七）。

(26) 前掲書所収「名取洋之助」pp. 一二六～一二七（執筆者三神真彦）

(27) 母体である太平出版印刷公司の設立は一九四一年十二月八日。太平書局は一九四三年夏ごろの設立と複数の資料からほぼ推定されるが、「太平書局」名義では一九四二年中にすでに三冊が出版されており、同書もその一冊。

(28) 草野心平「太平書局と「李陵」」（『中島敦研究』一九七八年、筑摩書房、p. 二九一）

(29) 一九四一年十二月八日の太平洋戦争の勃発に伴う日本軍の租界進駐は、上海の性格をすっかり変えてしまい、租界の中立性が消滅しもはや国際都市でなくなったときそこは、〝特殊な占領区域という意味しかもたなく〟なり、それまでの英米色の一掃が行われ、〝以後、上海での各方面に日本色が強く浸透し、「日本人の上海」の観を深めていった〟（羽根田市治『夜話　上海戦記』、論創社、一九八四年、p. 一七二、羽根田はその当時、上海特別市政府内で日本語教師を務めた人物）という。